

水ける生

聖霊による刷新のために

2024

秋季号

No.154

収穫の主

全国コムニオ奉仕会 コーディネーター 小熊晴代

猛暑とゲリラ豪雨と乱立するユスリカの蚊柱に恐れをなして「お祈り散歩」から遠ざかること三ヶ月、ようやく秋の訪れを肌で感じるようになった9月の末に近所の川沿いの遊歩道に向かいました。秋空の下、屋根のない世界は生命に満ちていました。遊歩道と並行して流れる川は背高なヨシやマコモに覆われて水面がほとんど見えませんが、わずかな隙間から瑠璃色の生き物が飛んでいくのが見えました。たまにしか会えないカワセミです。枯れ姿のススキやセイタカアワダチソウの間に赤いヒガンバナや黄色いヤナギバヒマワリが見え隠れします。

川の両側に広がる田んぼでは、すでに稲刈りが終わった所がいくつもありました。残された切り株からは青々としたひこぼえがまっすぐ伸びています。ちょうど稲刈り中の田んぼもありました。こちらで稲穂の間からまっすぐ伸びていたのは、白サギの頭です。その数は30羽を超え、大家族です。農家さんがコンバインのエンジンをかけると、一瞬驚いたように羽を広げて低空飛行をしますが、すぐにコンバインが通過した後の地面に降りてきて、何かをついばみます。隠れていたバッタやカエルなどのごち

そうにありついているようです。

私が冷房の効いた部屋にこもっていた夏の間、あの米農家さんはおそらく何度も田んぼに足を運んで自分の目で稲の成長を確認し、綿密な準備や手入れをしながら収穫の日を待っていたのでしょう。「農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです」(ヤコブ5・7)。

戦争、自然災害、詐欺、いじめ、心の病。荒廃が広がるばかりに見えるこの時に、イエス様の声が響きます。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」(ルカ10・2)。聖霊の雨は大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与えます(イザヤ55・10参照)。

二〇二一年十月に教区ステージから始まった世界代表司教会議(シノドス)第16回通常総会は、10月2日から27日まで、今まさにローマで開催中のシノドス総会第二会期で終結します。聖霊がこれからもたらしめてくださる豊かな実りを収穫する忠実で喜びに満ちた働き手として、同じ聖霊によって私たちが日々新たにされますように。

☆ 目 次 ☆

巻頭文・収穫の主(小熊晴代)	1
聖霊の夏作業	
—マゼランの上陸地とオタクの聖地で.....	2
「祈りの集いリニューアル」研修会に参加して	
(岡園優子、植田迅、簡琦恩、菊地彩衣)	4
アジア・オセアニア大陸ユースリーダー会議に参加して	
(神保恵)	6
故・川村所司神父様を偲んで(金子知香子)	8
ミサの中にある聖霊降臨の霊性(畠基幸神父)	9

発行

聖霊による刷新

全国委員会

編集委員

中村友太郎
益田 薫

購読料(送料込み・年1600円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021

東京都品川区上大崎2丁目

10-34-2-312

聖霊による刷新全国委員会

Email: ikerumizu.livingwater@gmail.com

郵便振替 00190-1-18878

口座名 聖霊による刷新全国委員会

聖霊の夏作業

——マゼランの上陸地とオタクの聖地で

全国コムニオ奉仕会コーディネーター 小熊晴代

マゼランの上陸地、セブで

7月24日〜26日、フィリピンのセブ市でカリスのアジア・オセアニア大陸コムニオ奉仕会コーディネーターティングチームの会議が開催され、私もメンバーの一人として参加しました。これは、二〇一九年六月にカリス発足後、新型コロナウイルス感染のパンデミックで延期されていた対面式のアジア・オセアニア大陸コムニオ奉仕会の会議が昨年二〇二三年の三月にマレーシアのコタキナバルで開催された際、各国とミニストリー部門の参加者約20名からコーディネーターティングチームとして選ばれた11人が初めて集まった定期会議でした。

フィリピン中部のセブ島に位置するセブ市は北部の首都マニラに次ぐフィリピン第二の都市で、大航海時代の探検家、マゼラン上陸によるフィリピンでの

キリスト教発祥の地です。24日、成田空港からの直行便で5時間半、私もセブ島に初上陸しました。会場のセブ・クインセンテナル・ホテルに到着しました。このホテルはカリス・フィリピンのコムニオ奉仕会コーディネーター、フェ・バリノさんが経営しており、ホテルの名前もキリスト教発祥五百周年が由来で、館内の装飾も信仰にあふれたものばかりでした。インドのシリアル・ジョンさんをはじめ続々到着する参加者と共に、初日の夕方にはセブ大司教区のホセ・パルマ大司教様を表敬訪問、ご私邸で夕食をご馳走になりました。

二日目、25日の午前は、フィリピンの契約共同体の信徒リーダー、ジュン・クルス氏指導で、二〇二二年に開催されたFABC（アジア司教協議会連盟）50周年記念総会の最終文書、『アジアの諸民族とともに旅す

る』から選ばれた主要テーマをもとに、シノドスにならつて「聖霊による会話」をしました。

午後は、今年の4月に改訂されたカリスの規約について説明がありました。一つは、アジアとオセアニアが分割されて個別の大陸コムニオ奉仕会を形成すること。これで従来の4大陸からアフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ、アジア、オセアニアの5大陸となりました。つまり、今回はアジア・オセアニア大陸のコーディネーターティングチームとして最初で最後の会議となりました。もう一つの変更は、ユースの各国代表の年齢制限が30歳未満から35歳未満に引き上げられたことです。夕方にはマゼランが建てた十字架や幼きイエス像があるフィリピン最古の教会、サントニーニョ教会でミサに与りました。

最終日の26日、午前には今後

のカリスのイベント、とくに聖年の二〇二五年四月にローマで開催される主要イベントの説明がありました。この日はアジア・オセアニア大陸のユースリーダー会議の初日であり（日本からも神保恵くんが参加）、午後から合同で賛美と交流をし、ミサに与りました。司式は来日して黙想指導をしていたいたことのあるバート・パスター神父

でした。80代の現在もカリス・フィリピンの霊的指導者として活躍しておられ、心臓の手術を受けた後はとても元気になられたそうです。ミサ後は歌や踊り、満載の明るく賑やかな夕食会、フィエスタ・フィリピンでお開きとなりました。小さなサントニーニョ像やカリスのロゴ入りグッズをたくさんお土産にいただいた、26日に帰国しました。

キリスト教とカトリックカリスマ刷新の歴史や経緯や規模がフィリピンと日本とは違うとは言え、今回はカリス・フィリピンの司教団との密接なつながりと、とくに空港の送迎から夕

食会の踊りに至るまで協力してくれた多数の契約共同体の質・量両面で豊かな人材力を目の当たりにし、圧倒されるばかりでした。

オタクの聖地、秋葉原で

日本でカリスを代表する私たち小さな群れも、日本で与えられている使命を果たすべく、聖霊の声に聞き従いながら「祈りの集い研修会」を8月23日～24日に開催しました。パンデミックが収まってから徐々に再開している、あるいは再開を望んでいる対面式の祈りの集いに必要な糧を研修会という形で提供するよう促されたからです。テーマは、「祈りの集いリニューアル！ 力と愛と思慮の霊によって」、場所は二〇一八年にオーストラリアからマリー・アン・ゲーティングさんを迎えて開催した執り成し研修会と同じ、秋葉原のビルの7階にあるレンタルスペースです。宿泊の必要な参加者は各自で場所を確保する必要がありますが、両日とも北海道



参加コーディネーターとパート神父



セブ大司教区 パルマ大司教様と



ダンサーもリーダーたちもサントニーニョを揚げて踊りました



マゼラン・クロスと共に

から関西の奈良県、大阪府まで、50名強の参加者がありました。現時点で祈りの集いを開催している東京の初台教会、松戸教会、ユースグループ、名古屋の南山教会グループが賛美を担当し、全国コムニオ奉仕会コアグループのメンバーが4つのテーマで講話を担当しました。23日は畠神父様が「聖霊降臨（ペンテコステ）の文化」について、私が「カリスを通して聖霊が行って

おられること」について話しました。24日には、中村友太郎さんが日本のカトリック聖霊による刷新のごく初期に招かれて培ってきた主との交わりを通して祈りの集いの恵みを分かち合いました。今回も賛美リーダーとして恭子夫人と共に大活躍だった秋元伸介さんは、「聖霊の賜物、とくに言葉の賜物」について明確な教えを与えてくれました。この4つの講話の内容については、今号から始めて順次こちらに掲載していく予定です。24日の派遣のミサ後は茶話会で参加者同士が分かち合いできる

時間をもうけ、今回の研修会で学んだことを覚えているかどうかのクイズも秋元先生から出題され、なかなか雰囲気でお開きとなりました。後述の参加者の証しからも聖霊の祝福が伝わってくると思います。

「祈りの集いリニューアル」研修会に参加して

奈良・登美ヶ丘教会 ルチア岡園 優子

♪*天が開き恵みが今ふりそぞぐ*（くり返す）

主をほめたたえ喜び歌おう
新しい歌を主にささげよう♪
（神は愛・69番）

今回の研修会に導いて下さったのは主からの特別な贈り物でした。浅草橋にある古いビルの七階、ドアを開けると何とそこは、素晴らしいキリストの香り、天国の香りに満ち満ちていました。

たくさんさんの悩み、悲しみを抱え涙と共にたどり着いた私を、主はやさしく迎え入れて下さいました。そして、若い人達の高い賛美と共に、いつしか罪人

研修会が始まる前に会場で奉仕者だけで祈ったとき、「57年前のデュケイン・ウィークエンドのように、これはアキバ・ウィークエンドになる」という預言がありました。今や世界的に名高い秋葉原で灯された聖霊の

火をそれぞれの教会でも家庭でも「らしからぬ所」でも新たに灯すことができますように。私が最近よく口ずさむ歌のように、「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」、愛と力の思慮の霊によって。

の私を高間へと導いて下さったのです。東京のこの場所に聖霊のいぶきを降り注いで私達を祝福して下さいました。賛美の中、スクリーンに写し出された大きな十字架、このイエス・キリストの十字架によって赦され癒されたのです。主に心から感謝致します。

また、畠神父様、秋元様、小熊様、中村友太郎様のご講話をお聞きして、聖霊の素晴らしさをあらためて知ることができ勇気を頂きました。

聖霊を愛し、親しく交わることを恐れてはいけない、諦めてはいけない、聖霊のやさしく力

強い助けによって、私達は何度でも新しくされ、フレッシュスタートできると、心に強く感じたのです。

帰りの新幹線の中では、イエス・キリストのやさしい温もりを抱かれ、身も心も若返ったような思いでした。二日間、本当にありがとうございました。

八月東京での研修会に参加して
カトリック旭川六条教会

植田 迅

去る8月23日（金）東京秋葉原での祈りの集い研修会、翌24日（土）カトリック初台教会でのアルファコースの研修会を夫

婦で受けて参りました。私たちは北海道旭川市在住のカトリック信者です。旭川の祈りの集いは一九七七年より、またアルファコースは二〇〇九年より行われていますが、四年前のコロナ禍のため、近年はリモートで行っておりまして。二日間賛美の歌を対面で歌い、神父様や講師の皆様の講話を拝聴し、改めて聖霊の満たしの重要性を痛感致しました。そして渴いている自分を認識出来ました。

今回の研修を受け、早速対面によるアルファコースの再開を決意し、10月5日(土)より旭川の六条教会にて行うことに致しました。実は、コロナも落ち着いてきたので、そろそろ対面のアルファコースをと考えていたのですが、その際飲食は省こうと思っておりました。三年間のリモートに慣れたこともありアルファコースにおける飲食にさほどの重要性を感じなくなっていたからです。

しかし、アルファコース研修の時、牧師先生の講話で「共に

飲み、食べることは、私たちが考えている以上に、霊的な行為なのです」と言う言葉に衝撃を受け、私たちが大きな間違いを犯していることに気付きました。10月からのアルファコースでは、気持ちも新たに、みんなで食卓を囲み、大いに神様について、聖霊について語り合い、深い分かち合いをしたいと思っています。

賛美チームの奉仕に招かれて

簡 琦恩

聖霊の招きに答えてよかったと思います。

私は信仰の弱い人だと思っていますので、いつも賛美リーダーを頼まれる時、不安が伴って、この賛美は皆が神様により近づけたのかと疑問を抱いています。感覚だけに頼っての賛美ではなく、基盤としての知識があった上での賛美リードをしたかったです。この黙想会のテーマが分かる前、講話の中に賛美についての教えがあると聞いていた瞬間、これは私が欲しがっているもの

だと心が叫びました。

秋元さんの講話の中で、賛美、感謝、礼拝の流れを聞いて、これから賛美リーダーを頼まれた時、選曲の順番などにはもう迷いはないと自信を持つて自分に言えるようになりました。良い先生は学生に知識を教えた後に知識で実践できるかどうかの検証場を設けてくれます。イエス様は良い先生であり、すべては計画されていました。

賛美についての講話の翌日に私を含めユースグループは一つの賛美をリードすることになっていました。この賛美の中、聖霊の触れを感じて、恵まれている喜びと神の偉大さに体のふるえが止まらず涙も溢れ出そうとしていました。

からの種の変わらないほど小さい信仰しか持っていない私でも、イエス様は呼びかけてきました。私はその招きに答えをしながら続けます！

8月研修会の感想 菊地彩衣

私は、最近のことですが、私の前に沈黙が必要だと感じていて、ただ話さないと言う沈黙ではなく、心の沈黙がなかったような気がしていました。

今回の研修での秋元さんの講話でもありましたが、日々、少しでも聖書に触れるというのは本当に大切なことで、その聖書の箇所を静かに黙想する、そんな日々を送っていた時の私の心はもっと静かで穏やかだったな、神様に真っ直ぐだったと思います。

日常の本当に小さなことも今、私がここにいることさえも奇跡だと神に感謝して喜びのうちにすごす、これこそ刷新の第一歩、主に触れ、近づきたいと思うこと、それがまず第一歩だったと改めて感じました。

神さまと向き合うというのは心の静けさからで、心の静けさは神さまの言葉、つまり聖書の中にあることを日々忘れずに過ごしていきたいと思っています。

アジア・オセアニア大陸ユースリーダー会議に参加して

全国コムニオ奉仕会ユース代表 神保 恵

7月26日(金)～7月28日(日)の3日間、第一回カリス・アジア・オセアニア大陸ユースリーダー会議がフィリピンのセブ市において開催されました。参加者は各国を代表し集まった二十代から三十代の若者達で、参加国は台湾、韓国、シンガポール、インドネシア、マレーシア、インド、フィリピン、ニュージーランド、日本でした。プロダラムは各国シニアリーダーとユースによる交流や、それぞれの地域での活動と現状の報告がありました。ここ数年パンデミックの影響も受けて各国の集いの状況も大きく様変わりしたようです。その間に結婚して家庭を持った若者たちが集いをお休みしたままになったり、仕事の影響で離れてしまう人もいたようです。しかし、そのような中でもフィリピンとインドは集いに参加する人が増えています。そ

して現在のカリス・ユースは新しい局面に入り、各地の集いを再編成して合同で開催したり、これからは各国でもより協力し合う方向に向かっていきます。そのような流れから、去る9月27日～29日に日本と台湾のユースによる合同黙想会が初めて台湾で行なわれました。これについては次号で報告させていただきます。

また、今回のユース会議では癒しの証しがたくさん聞けましたので、それを分かち合いたいと思います。それは各国の若者がどうして聖霊による刷新に参加するようになったかというテーマの中でした。

①男性参加者の証し。男性の家族はもととヒンズー教徒でした。ある時、彼の父親が仕事の事故が原因で下半身麻痺になつてしまいました。そんな時にカトリック聖霊による刷新の方

と出会い、回心して洗礼を受けました。その後、母親が末っ子である彼(今、証しをしている男性)を妊娠中に胎内で脳が形成されていない事が判明し、医師からこのままではこの子は生きられないからと堕胎を勧められました。しかしそれを拒否し両親は脳がつくられるように神様に祈り続けました。そしてその子は脳がある健康な状態で生まれて今みんなの前で証しをして

てくれています。そしてその男性の兄も信仰を育みアウグスチノ会に入会したそうです。

②男性参加者の証し。彼は子供の頃に半身不随で一生歩けないと診断されましたが、聖霊による刷新に参加し、祈りによって、この状態を賛美し続けました。今では奇跡的に回復し、自力で歩けるようになったと証してくれました。

③女性参加者の証し。彼女は

10代で妊娠して、誰の助けも得られなかったそうです。孤独と不安の中で子供を産み育てる中で聖霊による刷新と出会い、希望を持って生きることができるようになり、今では夫や生まれた子供も賛美チームに参加しているという証しでした。

これらは思わず主に賛美と感謝を捧げたいような証しでした。彼らの話を聞いていると、癒やされて主を賛美するために戻って来たサマリア人のようにも思えます。イエスは身体の癒しと霊の救いも与えてくださいました。そんな彼らに共通している事は、家族や親戚や身近な人が聖霊による刷新に関わっている方が多かったという点です。彼らから影響を受けて聖霊による刷新の集いに参加するようになったとのことでした。ですから今回の参加者の中には親子、兄弟姉妹、夫婦、幼馴染、従兄弟同士などが含まれていました。これは日本のユースメンバーでも同じことが言えます。

「いつも喜んでいなさい。絶



えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて神があなたに望んでおられること

です。霊の火を消してはいけません」(一テサロニケ5・16) 19)。このように主のために働いているユースたちに聖霊の息



吹と希望を感じました。今回集まったユースたちにとって、それぞれ置かれている状況や場所が違うけれど、主への賛美の内



に聖霊による一致を力強く感じることができた会議となりました。

故・トマス・アクィナス川村昕司

神父様（東京教区）を偲んで

金子 知香子（いやしのためのミサ・世話役）

近年ペトロの家（東京教区司祭の家）で静養していらしたトマス・アクィナス川村昕司 神父様が8月18日（日）に90歳で御帰天なさり、ここに謹んで哀悼の意を表します。8月22日（木）に東京カテドラル聖マリア大聖堂で菊地功大司教様の主司式により告別式ミサが捧げられ、参列し、天国での永遠の安息をお祈り致しました。

川村神父様はいやしのためのミサ（聖心女子大学聖堂にて8月、9月を除く毎月第二日曜午後二時）で長年、協力司祭として故・小平正寿神父様（フランチスコ会）、パウロ・ヤノチンスキー神父様（ドミニコ会）、木寅義信神父様（マリア会）方等と一緒にミサを捧げて下さいました。コロナ禍中、非公開型で担当月にミサを捧げて下

さり、公開型再開後パウロ神父様と共に二〇二三年十月までミサを捧げて下さいました。公開型ミサ後の個人別の祈りの時間帯には穏やかで優しいお顔で、ご病人やご家族のお話に耳を傾け、熱心に執り成しの祈りをして下さり、有難く存じておりました。

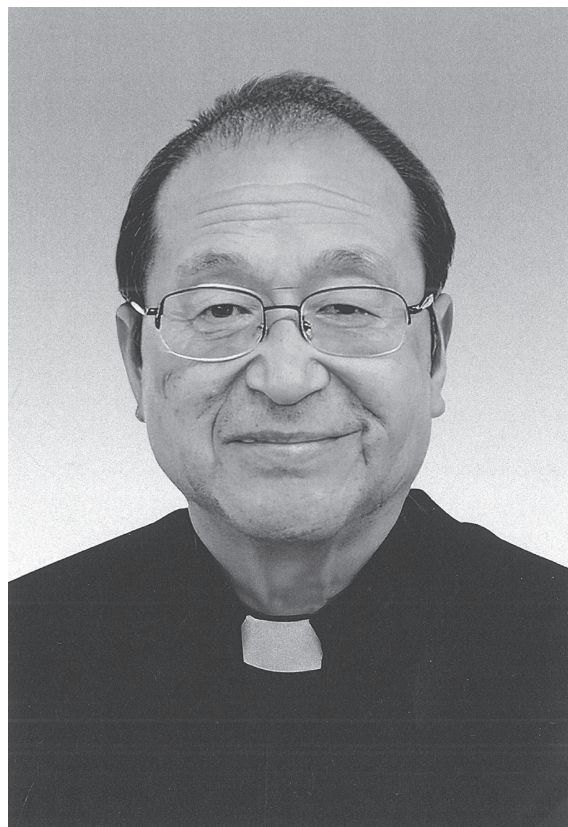
聖霊による刷新運動の全国大会や関東大会で海外からの招聘講師の神父様と共にミサをお捧げ下さり、四谷の祈りの集いや初台祈りの集い等で聖霊による生活刷新セミナーで講話をなさったり、参加者を霊的に導いていらつしました。

告別式の説教は晴佐久昌英神父様（東京教区）がなさり、ご自分が「司祭に叙階された直後に川村神父様が叙階のお祝いを述べながら『叙階のこの日を迎

トマス・アクィナス 川村昕司 神父

【略 歴】

1933年9月1日	スイス連邦ベルンに生まれる
1934年1月1日	受洗（スイス連邦フリーブルク）
1962年3月17日	司祭叙階（麹町教会にて）
1962年4月～1964年3月	世田谷教会助任
1964年5月～1969年3月	本郷教会助任
1969年4月～1976年3月	高校生指導担当者
1976年4月～1981年3月	豊田教会主任
1982年6月～1984年4月	マニラ教区 日本人司牧担当者
1984年4月～1987年3月	関口教会助任
1990年4月～2000年3月	梅田教会主任
2000年4月～2001年3月	カトリック東京国際センター
2001年4月～2003年3月	目黒教会助任
2003年4月～2006年3月	多摩西宣教協力体協力
2022年3月17日～	ペトロの家
2024年8月18日	帰天



えられたのも「子供の頃に夭逝した」弟さん「説教では実名」が天国で働いていたからだよ。』と言われ、天国で執り成しの祈りを川村神父様は『働く』と言

ミサの中にある聖霊降臨の霊性

畠基幸神父（御受難会司祭）

「聖霊降臨の文化（霊性）」と

いう題を「祈りの研修会」（八月二三日～二四日、秋葉原ハンドレッドスクエア）でいただいたおかげで、私の中で次第に「聖霊降臨の文化と霊性」とは何なのか見えてきました。

そもそも「聖霊降臨の文化と霊性」とは何か？ 霊性は心の福音化を表し、文化は福音の社会的側面を表す。心の内なる活動の形が霊性であり、その外なる活動の形が文化になり生活スタイルに表現されると思います。◆フランシスコ教皇は、現在「シノドス（共に旅する教会）」としてシノダリティ（協働性）を強調し、進め方として「霊によ

う表現を使うのだと思いました。』というお話を伺い、とても印象的でした。神父様の言葉をかりれば、川村神父様はきつと天国で今まで関わった様々な人

る対話」を強調されています。

また、「見て、識別して、行動する」方法論を使って、社会回勅（『ラウダート・シ』や『兄弟の皆さん』）で統合的なエコロジーを目指す地球規模のライフスタイルの見直しを呼びかけておられます。これは「聖霊降臨の文化と霊性」の具体化の模索なのだと感じます。多様な文化や国民が一つの言語で、父である神に賛美と感謝をささげた聖霊降臨は、「多言語多文化の多様性の一致を実現する交わり」の霊性であり、キリストの教会の誕生の原点です。

◆このことは、百日共同祈願の新聞第5号で一気に展開しまし

々のために働いて（執り成して）下さっていると存じます。改めて感謝致します。そして主が川村神父様に天国での永遠の至福をお与え下さいますようお祈

たが、その言葉が腑に落ちるのに随分と時間がかかりました。

私自身、四月から九月までの間に、カトリック医師会大阪支部総会、御受難女子修道会黙想会、大阪ヨセフ宣教修道女会黙想会、東京秋葉原の祈り研修会、福山府中合同祈り会、サクラファミリア（カトリックセンター）での関西地区合同の祈りの集いの講話を準備する中でジグゾーパーズのように聖霊による刷新関連の本を読み直し、聖ヨハネ・パウロ二世教皇、故ベネディクト十六世教皇、フランシスコ教皇の回勅や公式発言や説教などを組み合わせていくと、現教皇の『ラウダート・シ』や『兄弟

り申し上げます。ご参考までにお知らせ。【いやしのためのミサのURL】は<http://home.a04.iscom.net/ictus/hn.html>です。……の皆さん』の回勅の背景には、「聖霊降臨の霊性」があり、教皇様が「聖霊降臨の文化」に向かっているのではないかと気づかされたのです。

「聖霊降臨の霊性」や「聖霊降臨の文化」は、私の発案ではなく、聖ヨハネ・パウロ二世教皇の言葉です。先述の百日共同祈願第5号ではシリル・ジョン氏の『聖霊に駆り立てられて―新しい千年期におけるカトリック・カリスマ刷新』（聖母文庫）から当該箇所を引用し掲載しました。「これほど希望に満ちている現代に、聖霊を知らせ、聖霊が愛されるようにしなさい。『聖霊降臨の文化』を生み出す手助けをしなさい。それだけが人々の間に、愛のある親密さを造り上げ、相互依存の文明を築き豊かにします。熱い思いで忍耐強く、決して倦むことなく祈

りなさい。「聖霊来てください！聖霊来てください！」と。更に、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は生涯最後の公式勧告として聖霊降臨祭前夜の夕べの祈り（二〇〇四年五月二十九日）の説教の中で述べられました。「聖霊降臨の靈性が教会の中で、祈りと聖性と交わりと宣教の刷新された推進力として広まることを私は切望しています。」同教皇は、教皇職就任の直後（一九七八年十月十六日）からカトリック・カリスマ刷新の動きに注目し、教理省長官にラッチンガー枢機卿（後のベネディクト十六世教皇）、教皇庁説教師にカンタラメッサ神父（後に枢機卿）を任命し、カトリック教会の伝統の基盤の下に、聖霊の働きとそのカリスマ刷新の運動を見守り、教会内の活力となるように願っておられたのです。その教皇が、大聖年への取り組みの中で、聖霊の年の一九九八年五月三〇日（教皇在位20年）聖霊降臨祭の日付で発布された使徒的書簡「主の日―日曜日の重要性―」（



秋葉原の研修会場にて

中央協議会発刊）は、「聖霊降臨の靈性」を育む「主の日」の豊かさを歴史と意味の両面から解き明かしています。

「記憶を呼び覚まし、あらゆる世代の信者に復活の出来事をもたらすのは聖霊です。聖霊は内的なたまものです。それは、わたしたちを復活した主と結び付け、一つのからだという親密さのうちに兄弟姉妹を結びつけます。そしてわたしたちの信仰をよみがえらせ、愛によって心を満たし、わたしたちの希望を新たにします」（85項99頁）。

そして、「日曜日は週に一度の『盛大な祭儀』として、暮れることのないあの日曜日が来るまで、教会の巡礼の時間を定め続けるでしょう」（87項101頁）。

ここに「聖霊降臨の文化」の萌芽を見るのです。「文化」は「靈性」によって形作られていきます。形骸化したミサではなく、血の通った生き生きとしたミサを祝うために、日曜日は、単にキリストの死と復活を記念するだけでなく、十字架の勝利のキリスト、復活された主が御父のもとから約束の聖霊を送り、信じる者の心を愛の火で燃え立たせ喜びで満たされる日です。上記28項には、「・・・復活した主と出会った使徒たちの喜びをキリスト者が再び味わい、主の霊といういのちを与える息吹きを受けるとき、『週毎の復活祭』はある意味で『週毎の聖霊降臨祭』となるのです」と述べられています。27項に書いてあることなのですが、「日曜日」といっても何も感じませんが、英語で Sunday は「太陽の日」を

意味します。異教のローマのカルendarだったのです。しかし、主の復活は太陽の日で、太陽の光は「キリストの光」として、また太陽の炎は、「聖霊の火」として象徴されたのです。そして、「主」とは発音してはならない神の名「YHWH」を七十八人が翻訳したときに使った称号「主」を復活したイエスに当てはめました。「イエス・キリストは主である」（フィリピ2・11、使徒言行録2・36、一コリント12・3）と告白し、「安息日の後の第一日」を「主の日」と呼び、週毎に集まることが使徒たちの時代から始まりました。これがキリスト教文化の日曜礼拝の礎です。日曜日の文化が「主の日」の文化へ変容した歴史を思うとき、現在は「週末」の文化になり、世俗のレジャーの休日となったことに対して、「週毎の聖霊降臨祭の文化」を再発見させることを教皇ヨハネ・パウロ二世は望んでおられたと、私は推測しております。

◆教皇は第三千年期を前に、日

曜日の根本的な重要性を再確認し、日曜日の秘儀、日曜日の祭儀の意味、キリスト者の生活と人間生活にとっての日曜日の重要性を再発見することが求められていることを何度も強調されました（同書簡1項と3項）。またそのために、第二バチカン公会議の教えを引用しています。「日曜日に、キリスト信者は一つに集まらなければならない。そして神のことばを聞き、感謝の祭儀に参加して、主イエスの受難と復活と栄光を記念し、彼らを『新たに生まれさせ、死者の中からイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与えた』（一ペトロ1:3）神に感謝をささげるのである」（同書簡6項）と。

ミサを主日に祝うことの喜びを私たちは再発見しなければならないのです。同時に、「週毎の聖霊降臨祭」とは、何を意味しているのか。教皇は、聖霊による刷新の「祈り会」のことを考えていないのだろうか？ 司式司祭がいないときに、集会祭



秋葉原の研修会場にて

儀が行われたことも思い出す。古代の教会では、ミサが行われるのは司教のいる教会だけで、助祭が各小教区へ聖体を運んで信徒に配っていた。パンを裂いて杯に欠片を入れるのは、イエスのからだと血が一つになる意味と、小教区へと配るパンと欠片とが同じことを示すとの説明を聞いたことがある。太陽がある前に信徒は集まり、太陽の光であるキリストを賛美し、キリストの体であるいのちのパンを拝領した。「主の日」に一つに集まるのは、復活の日の記念

と同時に、聖霊降臨の記念でもあるのです。聖霊は罪のゆるしを与える太陽の炎のシンボルである聖霊の火が悪を追いつ出し信者の心に罪のゆるしを与え、主の現存である平和の心を信者に与えたのです。これは、交わりの儀における主の祈りの副文と平和の祈りの所作を連想させます。今回この使徒書簡を読んで引用した、感謝の祭儀が「主イエスの受難と復活と栄光を記念する」とあるところに、とても新鮮な響きを感じました。通常は、「日曜日はキリストの死と復活を記念する主の日」と言っていたので、「イエスの受難と復活と栄光」と「栄光」の印象は薄かった。過越の神秘が「受難と復活」だけで「栄光」をあまり意識していなかったこと、「過越の神秘が聖霊降臨によって完成される」ことは、知っていてもわからなかった感じです。

◆ところで、聖霊による刷新に關しては、イブ・コンガール枢機卿というドミニコ会の著名な学者が聖霊の大書『わたしは聖霊を信じる』（三巻本、サンパウロ刊行）を書き著わし、「カトリック・カリスマ刷新」の発展に關して、「小教区で受け入れられるならばであるが、しかし今のままのあり方では」（第二卷二一五頁）と否定的な評価をしている一方で、「福音の持つ意義を現実のものとして提示」するためには小さな信仰共同体のほうが適していると評価しました。「テゼー」や契約共同体、基礎共同体や様々な運動体、すなわちクルシリオ、フォコラーレ運動、ラルシュ共同体、マリッジ・エンカウンター、聖エジディオ共同体運動、新求道共同体など数多く誕生しました。それゆえに「『刷新』は神がわれわれの時代に与えてくださった恵み」（同上二一七頁）であると結論づけました。この結論は、一九七九年のものです。スーネンス枢機卿は、ご自身、レジオマリア運動の創立者ですが、これらの小教区を超える刷新の運動を「恵みの潮流」と呼び、国際カリスマ刷新の事務局を自身

の教区に設立して応援しました。歴代教皇の保護の下に「刷新」は成長し、フランシスコ教皇は、デューケイン大学の学生黙想会で始まった聖霊刷新運動の五十周年を記念して、この「カトリック・カリスマ契約共同体とその仲間（CFCCF）」と「国際カトリック・カリスマ刷新奉仕会（ICCRS）」の両者を「恵みの潮流」から生まれた一つの奉仕機関として統合し、二〇一九年六月・聖霊降臨の日に、教皇庁内の「信徒・家庭・いのちの省（部署）」所管に組み込まれました。それが「カリス」です。中央協議会の「カリス」（Catholic Life Service の略語）は、教会の火災や災害の保険制度ですが、新しく発足した私たちのカリスは、「カトリック・カリスマ刷新国際奉仕会」の英語表記の頭文字を並べたもので、「恵み」を象徴します。このシンボルと活動については、小熊晴代さんが「生ける水」誌上で何度も報告しているので省略しますが、日本側の代表として「

カトリック聖霊による刷新全国コムニオ奉仕会」のコーディネーターとして身を挺して奉仕している姿に頭がさがります。

◆私たちの「カリス」は、聖霊降臨の霊性の普及を促進するために、三つの目的から成り立ちます。（一）聖霊による洗礼の普及、（二）エキュメニカルな活動、（三）貧しい人びとへの奉仕です。

フランシスコ教皇が、カリス創立の目的をこのように規定されたのは、「聖霊による洗礼」の普及によって、聖霊降臨の霊性が教会に培われることを願うてのことだと思えます。教会は洗礼によって神の子となり新しい契約がここに刻まれていますが、それを思い起し、実践しなければ、在ってもないのと同じになります。再び「それを燃え立たせる」（二テモテ1:6）ことが一番の目的なのです。「霊に満たされる」経験は、ルカ福音書と使徒言行録に描かれています。ルカによる福音書では、イエスご自身の体験として

聖霊が宣教の初めから、「霊」を注がれ、「霊」に導かれ、「霊」に満たされて御父との愛を目に見える形にされた原秘跡であることが描かれています。使徒言行録においては、聖霊に満たされた母マリアの祈りと弟子たちの集まりの上に、イエスと同じように聖霊が天から降り、目に見える形でとどまり、聖霊に満たされ、神の偉大な業を賛美し感謝したのでした。

（以下、紙面の都合で中略させていただきます。―編集子―）

◆先に触れた、四十年ほど前にドミニコ会士のイブ・コンガール師から受けた挑戦は、私のインスピレーションでは、「カリスマ刷新の発展のためには、ミサや典礼との関連を示さなければならぬ」というものでした。これがずっと心にかかっていましたが、ようやく最近これかなという観点でミサをささげることが出来るようになったので、簡単に分かち合っておきたいと思っています。私たちの刷新における「賛美と感謝の集い」は

ミサと別ではなく、同じルーツ、「聖霊降臨」の恵みから生まれて合体したもののなのです。つまり、両者は共に「過越の神秘」を構成し、「賛美と感謝」の祈りそのものであり、教会の生活の座は、現在の共同体の集いそのものです。それは最後の晩餐を現在化すると同時に、いま参加している信者に聖霊がくだります。それは、まさに愛の共同体への聖霊降臨です。ミサ中に働く聖霊は、過越の神秘の聖霊降臨によるものです。これに気づくとミサが生き生きとしたものになるでしょう。

「生ける水」定期購読者の皆様へのお知らせとお願い

十月からの郵便料金の値上げに伴い、2025年度より年間購読料が送料込みで1,700円となります。何卒ご了承下さい。